令和 4 年 11 月 22 日

文教産業常任委員会
委員長　早川　文乃　様

<u>文教産業常任委員　田村大治郎</u>

文教産業常任委員会行政視察報告書

下記の日程で行政視察を実施しましたので、別紙のとおり報告します。

記

1. 視察期日及び視察先

令和 4 年 11 月 15 日（火）

愛媛県西条市　「小中学校 ICT 教育推進事業について」
「アウトドア活動促進による地域活性化に向けた取り組みについて」

11 月 16 日（水）

愛媛県松山市　「地産地消促進計画について」
愛媛県大洲市　「観光まちづくり戦略ビジョン、観光まちづくり町家活用エリア実施計画について」

11 月 17 日（木）

楽天農業株式会社　「大洲冷凍工場見学および事業説明」

2. 視察参加名簿

委員長	早川　文乃
副委員長	米弥　又由
委員	重廣　正美
委員	重村　法弘
委員	岩藤　睦子
委員	有田　茂
委員	田村　大治郎
委員	西村　良一
委員	松岡　秀樹

以上 9 名

3. 視察報告・所感　別紙

(別紙)

視察先	愛媛県西条市			
視察日時	令和 4 年 11 月 15 日　13：30～15：30			
視察項目	小中学校 ICT 教育推進事業について アウトドア活動促進による地域活性化に向けた取り組みについて			
対応部署名	西条市教育委員会、産業経済部観光振興課			
自治体概要	面　　積	510.04 ㎢	人口（令和4年9月末日）	105,966 人
	議員数	28 人		
	愛媛県東部に位置する西条市。南は西日本最高峰の「石鎚山」、北は瀬戸内海に囲まれている。気候は温暖で、良質な自噴水「うちぬき」に代表される豊かな自然環境と、由緒ある寺や名湯といった魅力的な観光資源に恵まれている。日本一の生産量を誇るはだか麦やあたご柿、春の七草など、多種多様な農作物の一大産地であるとともに、飲料、電気機械などの工場が立地し、四国最大規模の工業地帯となっている。（西条市ＨＰ） 郷土料理：金時豆の甘煮、押しずし、トリ貝飯、芋炊き			

視察内容

ＩＣＴ：「情報活用能力」を「読み・書き・算盤」と同じ基礎能力に位置づけ、人と人とがつながりあう、一歩先の社会のあるべき姿を目指して、スマートシティ西条（将来ビジョン）、教職員用グループウェア、統合型校務支援システム、インターネットブレイクアウトの採用、校務環境のフルクラウド化（ネットワークの強靭化）、テレワークシステムの構築、バーチャルクラスルームの取組、ＩＣＴを活用したスマートスクール実証事業、学校へのタブレット端末の配付、西条市におけるＧＩＧＡスクール環境、西条市における教職員研修の実施、ＭＥＸＣＢＴ（メクビット）・学習ｅポータルへの対応

アウトドア：（株）モンベルとの連携について、「アウトドア活動促進による地域観光活性化に向けたグランドデザイン」概要説明、地方創生拠点整備交付金の活用、西条市アウトドアオアシス石鎚概要、「ジャパンエコトラック」の整備、「ＳＥＡ　ＴＯ　ＳＵＭＭＩＴ」の開催

所　　感

西条市の学校教育のＩＣＴ化は、2010 年に電子黒板を導入しモデル的にタブレット端末を導入する等スタート時期も早くその為、今日に至るまで多くの検証を繰り返しながら取組んでおられることから長門市にとって参考とする部分は多い。学習環境の整備を進める中で 2011 年には教職員用グループウェアを導入する事で情報共有に変革をもたらし、2014 年から取組まれた校務・帳票類の電子化によりＩＣＴ機器を活用した教職員の業務効率化も機器の導入促進に繋がったと考えられる。また、保護者との連絡メールサービスは 2012 年に双方向の情報共有手段として確立されこれらの実現によりまずは教職員と保護者がＩＣＴ機器活用の有効性を実感する事になったのではないかと思われる。現在の長門市については教職員の利用環境の促進は進んでいるものの保護者との連絡については一部を除いて一方向であり、学校からのお知らせについてはほとんどが紙媒体を用いたものになっている、紙媒体を懐かしむ気持ちはあるもののこれら機器の活用が便利な時代になったことを実感した。校務パソコンの利用環境についても教職員のワークライフバランスに配慮したテレワークシステムの導入が 2015 年、本年 2022 年には校務環境をオンプレミスからフルクラウドへ移行したことで決まった部屋の決まった端末からでなければ行えなかった校務作業を離れた場所からも行えるようになったことでより業務改善に繋がったものと思われる。また、校務と教務で端末の共有が可能になるような効果もあったと思われる。このように教職員の教務環境をＩＣＴ機器の活用で変革していくことで、児童生徒の学習環境への導入がより促進されるのではないかと感じた。全ての普通教室に電子黒板を配置し、指導者用電子

教科書が電子黒板で利用可能で主要5教科プラス音楽が利用可能となっているとのことで活用に興味を持った。遠隔地を結んだバーチャルクラスルームについても日常的に活用されており、少子化の進む長門市において複式学級の授業改善につながるものと考える。タブレットの活用として持ち帰りや、協働学習や個別学習支援に活用されている。また、児童生徒用ポータルや学習管理アプリの活用も進んでいる。子どもの学習環境の考え方や自由進度の学習など、個別の能力をより伸ばし、変化の大きな時代を生きる力をつけるために、ＩＣＴ機器を積極的に活用し、セキュリティを守りながらストレスのない学習環境および校務環境の実現に向けて理解を深めていく必要があると感じた。

西条市は自然環境に恵まれ、西日本最高峰の石鎚山と、西条地域に自噴するうちぬきと呼ばれる地下水の恩恵を活かした取組が充実している。同市が2018年に策定した「アウトドア活動促進による地域観光活性化に向けたグランドデザイン」によると、現状の課題を（1）フィールド整備、（2）拠点整備、（3）誘客手法・情報発信、（4）人材（アウトドアツアーガイド、インストラクターの不足）、（5）防災・減災と分析し拠点施設の整備や登山を中心としたキャンプやカヤック、サイクリング等のアウトドア活動の受け入れと情報発信に取組まれた。この取組を通して意識されていることは「地域住民」であり、拠点施設は地域住民の利用のための機能を持ち、計画では地域住民自らアウトドアを楽しむまちの実現を目標としている。また人材確保については西条市の自然環境に適する専門知識を持つ民間事業者との協力関係をつくることで課題解決に結び付けたが、事業者と行政の双方にとってメリットの多い関係であることが感じられ参考にしたい。本来地域活性化とは経済的な側面だけでなく、地域住民の福祉の向上を図り住みよいまちづくりに繋がるものであるべきだと考える。西条市のこの考え方は大変参考になった。長門市も特徴的な海岸線を持ち、五名湯を誇る温泉地であることからこれらを更に活かした事業展開への可能性を感じた。

(別紙)

<table>
<tr><td>視察先</td><td colspan="4">愛媛県松山市</td></tr>
<tr><td>視察日時</td><td colspan="4">令和 4 年 11 月 16 日　9：00～10：30</td></tr>
<tr><td>視察項目</td><td colspan="4">地産地消促進計画について</td></tr>
<tr><td>対応部署名</td><td colspan="4">松山市総合政策部企画戦略課、産業経済部農水振興課</td></tr>
<tr><td rowspan="3">自治体概要</td><td>面　　積</td><td>429.40 ㎢</td><td>人口（令和4年10月1日）</td><td>504,509 人</td></tr>
<tr><td>議員数</td><td>43 人</td><td></td><td></td></tr>
<tr><td colspan="4">平成 26 年に瀬戸内海国立公園指定 80 周年や道後温泉本館建設 120 周年、四国八十八カ所霊場開創 1200 年を迎え、官民一体で観光客を歓迎するムードを醸成しようと平成 25 年 3 月 25 日、「おもてなし日本一のまち」を宣言した。（松山市ＨＰ）
郷土料理：ひじきのもぶり鮓、松山長なすそうめん、しょうゆもち、緋のかぶ漬、松山鮓
キャッチフレーズ「日本で一番笑顔があふれるまち」</td></tr>
</table>

視察内容

地産地消推進計画について

松山市の農業者の現状、農業者の確保・育成に関する施策、新規漁業就業者育成強化事業の概要、連携中枢都市圏の取組の推進、まつやま農林水産物ブランドの認知度向上や販路開拓に向けた取組、加工品開発支援

所　　感

「紅（べに）まどんな」や「せとか」に代表される松山市の農林水産物ブランドは高収益が期待でき、そのため生産者に対して品種の生産整備の導入費用や、平成 30 年豪雨災害から復興した農地の農業継続を支援する補助金等、支援体制が充実している。まつやま農林水産物ブランド化推進協議会は産官学に加え新聞、テレビ、ラジオといったマスコミ各社も加わりブランド開発や認定だけでなく情報発信も担当する。マスコミが参加することによりブランドのＰＲを効果的に行うことができる。まつやま農林水産物ブランドに認定されるためには 1. コンセプト、2. 市場性、3. 独創性、4. 信頼性、5. 将来性の 5 項目を満たす必要があり条件が厳しく設定されている。認定のための条件の厳しさは松山市がＰＲするブランド品の市場での信頼性にも繋がり、高付加価値を維持する効果があると思われる。ブランドのＰＲについて従来は直接対面で行っていたが、コロナの影響を受けデジタルを活用したＰＲに変更したとのことだった。展示会場等での試食販売をオンラインでどのように行うか大変興味深く、今回の視察で見ることはできなかったが長門市のような大都市圏にアクセスが悪い地域でこそ導入すべきだと思い今後注目していきたい。また、ブランドのＰＲ方法の手段として「マルっと　まつやま」（旧マツヤマルシェ）と名付けたウェブサイト・ＳＮＳを使った情報発信を担当課で行っており、順調にアクセス数、登録者数が伸びている。ＳＮＳの特徴として旬の情報発信をタイムリーに行うことができ、どれぐらいのユーザーに情報が届いたかを数値で把握しどのような行動を取ったかを数値で把握でき非常に現代風で効果的な情報発信である。松山市は「ヤクルトスワローズ」のキャンプ地であることから、神宮球場でのヤクルトのゲームに「松山の日」がありそこで試合中まつやまブランドのＰＲを行うことができる。本年はヤクルトスワローズがリーグ優勝しており、担当課曰く「非常にありがたい」とのことだった。また、全国放送のテレビのプレゼントコーナーにブランド品を提供するような企画も合わせて、生産者の所得向上を実現するために持てる手段を全て使うという姿勢に感銘を受けた。

(別紙)

<table>
<tr><td>視察先</td><td colspan="4">愛媛県大洲市</td></tr>
<tr><td>視察日時</td><td colspan="4">令和 4 年 11 月 16 日　13：30～15：00</td></tr>
<tr><td>視察項目</td><td colspan="4">観光まちづくり戦略ビジョン、観光まちづくり町家活用エリア実施計画について</td></tr>
<tr><td>対応部署名</td><td colspan="4">大洲市環境商工部観光まちづくり課</td></tr>
<tr><td rowspan="3">自治体概要</td><td>面　　積</td><td>432.12 ㎢</td><td>人口（令和4年10月末日）</td><td>40,667 人</td></tr>
<tr><td>議員数</td><td>21 人</td><td></td><td></td></tr>
<tr><td colspan="4">伊予の小京都と呼ばれる大洲は、市の中央部を清流「肱川（ひじかわ）」が流れ、昔ながらの街並みが残り、美しい田園風景や山並みが特徴。歴史を感じさせるノスタルジックでどこか懐かしい場所、自然を満喫できる美しい場所など、情緒あふれる名所の数々が今も息づいている。
郷土料理：いもたき、ふぐ、かにめし、はも、とんくりまぶし、アマゴのさつま、大洲コロッケ、ハモ餃子、アマゴの開き（大洲市ＨＰ）</td></tr>
<tr><td colspan="5">視察内容</td></tr>
<tr><td colspan="5">官民連携による歴史的資源を活用した観光まちづくりについて（座学）
古民家再生の城下町見学</td></tr>
<tr><td colspan="5">所　　感</td></tr>
<tr><td colspan="5">平成 30 年 7 月西日本豪雨災害による復興が続いていた。産業構造としては第 3 次産業が 64.8%であることから、商業・サービス業のまちであることが伺える。市のシンボルとして大洲城があり、維持及び向上すべき歴史的風致として、1.肱川と共生する人々のくらしにみる歴史的風致、2.城下町と祭礼にみる歴史的風致、3.湊町長浜の祭礼にみる歴史的風致、4.中江藤樹と大洲「藤樹学」にみる歴史的風致、5.農村地域の民族芸能にみる歴史的風致を挙げている。今回の視察を通して特に目に留まったものは古民家再生事業である。行政が設立した一般社団法人と、地域の若手経営者と地元の銀行が設立した株式会社、古民家の風情を活かし高付加価値な宿泊施設として運営を行う専門的知見を備えた事業者の 3 者がバランスよく融合して新たなまちの調和を作っていると感じた。再生された古民家群がある街並みには地元住民の生活があるが、双方が干渉することなく溶け込んでいた。地元住民の住宅も補助事業を活用した修景など景観への配慮が見られ、古い建物の外観をそのまま活かすことや、事業を行う人々の服装や道具にまで統一感があり広い範囲を見て歩いたが、どこを見ても地域が同じ方向に向かっている心地よさを感じた。事業としては長門湯本温泉観光まちづくりと非常に似ていると感じた。どちらも魅力的な宿泊施設を誘致していること、そしてマネジメント会社の設立と銀行のサポートそして修景である。マネジメント会社の収入としては長門市が入湯税の一部を充当していることに対して大洲市は家賃収入である。大洲市の視察では、古民家再生と宿泊事業、歴史的な街並みと文化と肱川を活かした景観整備が調和をもって成功しつつあるように見られ魅力的である。事業はスタートしたばかりであり、今後の情報発信により目的とするインバウンドの誘致に成功するように願うと同時に、大変よく似たスキームで観光まちづくりを進める長門市にとっても大いに参考になる事例として引き続き注目したい。　また、城下町の視察に御同行いただいた児玉副議長は背広の胸にシトラスリボンを付けておられた。これは、愛媛県発祥のコロナに対する人権擁護の運動のシンボルであり、人権に対しての配慮が伺えた。</td></tr>
</table>

(別紙)

視察先	楽天農業株式会社			
視察日時	令和 4 年 11 月 17 日　10：00～12：00			
視察項目	大洲冷凍工場見学および事業説明			
対応部署名	代表取締役　遠藤　忍様、社長室、農業事業部			
会社概要	資 本 金	3,200 万円	従 業 員 数	124 名
	設立　2007 年 3 月 12 日 2020 年 1 月 1 日　楽天農業株式会社に社名変更 事業内容　オーガニック野菜の栽培、加工 本社所在地　〒795-0071 愛媛県大洲市新谷乙 335-1			
視察内容				
工場見学：工場の衛生管理、工程、設備 事業の説明：事業内容、質疑応答				
所　感				
社長のオーガニック野菜生産・普及への思いが詰まった工場見学となった。 カット工場の工程は大変衛生的であり、工場見学にも笑顔で対応していただいた。スタッフ教育が行き届き、従業員満足度も高そうだ。このような工場では事故は少なく、生産される商品も高品質が維持されるのではないか。 楽天農業（株）は愛媛の他に静岡、広島、長門・下関に農場を持ち現地スタッフを雇用する事で農業従事者の雇用拡大に貢献している。また楽天農業を卒業し自分で新規就農する人が土地を借りるために必要な経験を積ませ、地方銀行と提携したファンドの設立によって独立のための資金を借りられる環境を作っている。新規就農者にとっては大変ありがたく、社長がご自身で受けた苦労を元にした起業家支援であることが分かる。プレゼンの中で挙げられた問題の中では、有機農業での苦労として市場に出せないことに苦労されていると感じた。SDG's と農水省の新戦略「みどりの食料システム戦略」の時代に新たな市場や流通システムがまとめられ、従来の農産物と同時に有機農産物も市場で取引されるように願う。長門市での取組もこれから更に農地の集積が進み、さつまいもやブロッコリーを中心に農業者の雇用と安定した生産を進めていただきたい。その際に社長から提言のあった「住居」と「食」については我々の課題として取組まなければならないと考える。				